

総 括

中日友好労働者シンポジウムにおけるまとめの発言

中国職工対外交流センター秘書長 彭 勇



さきほど伊藤先生からは、どのように中日労働者の交流と協力を進めるのかについての展望に対して、きわめて豊富な提案がなされました。はじめに、日本人の戦争にたいする考えを分析し、戦争は国家の行為のみならず、個人とも密接に関連していること、日本は戦争の被害者ということだけを強調して戦争の発動者責任という反省を忘れてはならないことを指摘されました。続けて伊藤先生は、日本政府、現首相、裁判所、企業、全港湾労働組合、そして全港湾の組合員が、中国の戦争被害者による司法提訴を通じた賠償要求に対してどのような態度をとっているかを分析され、歴史を正視し深く反省することでしか、和解することはできないと指摘されました。教訓を明らかにし、後世に伝え、信頼を醸成することによってのみ、友好の道を建設することができる旨を指摘されました。中日両国の関係および労働者の交流について、伊藤先生は、経済的に相互に学び、産業構造の調整による新たな労働問題に共同で対応すること、政治的には互いに支持し合い、共同でアジアの平和と繁栄を築くこと、そして両国の労働者交流においては、交流を強め、友好を増進し、科学技術の発展と社会の変化がもたらす新たな問題に共同で対応し、労働の成果を共に享受するという建議をされました。伊藤先生の観点は私たちのシンポジウムのテーマに非常にマッチしたものでした。

今日一日、中日双方の代表が「歴史を心に刻み、未来に向けて、交流を強化し、友好を増進する」というテーマで、中日民間交流の歴史を振り返り、中日の労働組合が重点を置く活動の現状を交流し、新しい時代においていかに中日両国の労働者の交流と協力を強化するのかという展望において、相互理解を深め、団結を強化し、ともに発展を目指すという目的を達成することができました。多くの意見の一致をもつことができ、シンポジウムは成功しました。

現在の中日関係の重要なポイントにおいて、中日両国の労働者交流と協力の重要性と必要性はいつそう際立たせる必要があることを、だれもが認識しました。中日両国の労働者がさらに交流領域を切り開き、その形式と内容のさらなる豊富な交流をおこなうことで、互いの交流と協力をさらに深め、両国の労働者に奉仕し、民間外交の独自の役割をさらに発揮するでしょう。

この度のシンポジウムに参加し、つぎの三つの点に感銘を受けました。ひとつは、中国職工対外交流センターと日中労働者交流協会の協力がさらに深まったこと。今回のシンポジウムは両組織の交流における新しい形式であり、中日両国の労働組合と労働者の実際の状況と結合した共同の分析を行い、今後の交流と協力に多くの建議がなされました。われわれは今回のシンポジウムの基礎の上に、不断に経験を

中国側報告

累積して、さらに多くの友好的協力を展開するでしょう。二つ目は、両組織の協力を幅広い支持が得られたことです。今回シンポジウムに参加したのは、日本から日本各地の労働組合の指導者であり、産業組合や企業組合の代表、大学教授、地方議会の議員、民間団体の会員などでした。中国側は全国総工会の関係部門と産業工会、中国労働関係学院、工人日報と中国工会ネットのほかに、中連部、科学技術部などの部署の代表も参加しました。これらの部署や部門は過去においても中日両国の労働者の交流と協力に大きな支援をいただいていたことから、この場を借りて感謝を述べるとともに、引き続き両国の労働者の交流と協力にご支援賜りたいと思います。三つ目に、すべてのシンポジウム参加者がシンポジウムのテーマに沿って、真剣な交流を行い、積極的な質問を発したことが深く印象に残りました。まさに皆さんの積極的な参加と支持が、シンポジウムの成功を保障したのです。

この場をお借りして、中国職工対外交流センターを代表し、ここに参加したすべての代表、スタッフ、通訳のみなさんがシンポジウムに払った努力と貢献に対して、心よりの感謝を申し上げます。今回のシンポジウムはまもなく終了しますが、中日両国の労働者の交流と協力は永遠に終わることはありません。あす以降の数日の予定として、抗日戦争記念館の参観を通じた日本の対中侵略の歴史の真実を理解いただき、故宮博物館の参観を通じて中国の伝統文化を理解していただき、人民網日本語版のスタッフと交流し、京東集団の見学を通じて中国の物流業の発展の現状を見ていただくなどの予定を組んでおります。今回の中国訪問を通じて、日本の友人の皆様が全方位から中国を理解されることを信じております。そして、中国職工対外交流センターと日中労働者交流協会のさらなる友好協力の強化が、中日両国の労働者の交流と協力に大いに貢献するであろうことを信じてやみません。